

# 「他力門哲学」における覚醒の構造

伊 東 恵 深

## はじめに

清沢満之がその初期の論考を通して構想していた思想課題について、近年、哲学思想の立場からのアプローチによって光が当てられつつある。今村仁司は次のように指摘している。

清沢満之のように、仏教求道者にして厳格な哲学的思索者という二重の側面をもつ人の場合には、どちらに重点を置くかによって、著作の選び方がかなり違ってくる。これまでの清沢像は、主として浄土真宗大谷派の近代教学を確立した仏教者としての側面を強調するものであった。(中略)しかし、信念の人清沢のイメージが強まれば強まるほど、哲学者としての清沢の側面は陰にかくされる傾向があった。

一読して誰もが気づくように、清沢満之の精神はきわめて厳格な理論的精神であり、可能なかぎり厳密に論理を構築する人であった。

(『現代語訳 清沢満之語録』四五三―四五四頁)

清沢には、自己の信念に生きた仏教求道者としての側面のほかに、厳密な哲学的思索者としての側面があった。しかし、それは単に仏教の概念を西洋哲学の言語によって表現し直そうとしていたのではない。清沢は仏教の思想、なかでも親鸞が開顕した他力の信念を、例えば「有限」「無限」という西洋哲学の用語で捉え直し、論理的に再構築することによって、一切の存在に開かれた普遍的真理として顕揚しようと試行していたのである。

そこで本論では、清沢の初期の論考の中でも、他力門哲学、すなわち浄土真宗の教理を究明した「他力門哲学

骸骨試稿」(以下、「試稿」と略記)を取り上げて、有限存在における覚醒の内実について考究することにした。<sup>①</sup>

「試稿」は、すでに先学によって明らかなように、『宗教哲学骸骨』(以下、『骸骨』と略記)で構築された哲学体系を基本構想として、さらに浄土真宗の思想の骨格を哲学的に解明しようとした著作である。したがって、清沢における親鸞思想の受容と展開を端的に窺うことができる論稿であると言えよう。

また、清沢の初期の論考を尋ねることは、直接にはその思索の原点を追究する歩みであるが、そこでいかなる問題が問われていたのかを考察することは、清沢の生涯を貫通する思想課題を推究する営為でもある。それは同時に、清沢における浄土真宗の了解を窺っていく上で、われわれに大切な視座を与えるものであろう。

このような点を念頭に置きながら、清沢が「試稿」において再構築した他力門哲学の覚醒の構造について推究していきたい。

## 一 自利・利他・方便

宇宙ノ万有ハ彼此相関係聯絡シテ存在セサル可カラズ(中略)トセバ万有ハ皆各々能所ノ動作ヲ備ヘタ

ルモノナリ

〔清沢満之全集〕第三卷(岩波書店)、六〇頁。

以下、『全集』と略記)

これは「試稿」の「一六」万有心靈」の一節である。われわれ人間をはじめとする宇宙内の万有は、相互に係し連関し合って存在している。したがって万有は各自自から他に対してなす動作、つまり能動的側面と、他から自に対してなされる動作、すなわち所動的側面の二つをそなえているのである。清沢はこのように述べた上で、万有の能動と所動という二つの動作を次のように展開していく。

今實際的ニ此等ノ動作ヲ觀察スレハ自利利他ノ二用トナル 乃チ先ニ言フ所ノ所動(或ハ受動)ハ是レ自利ノ用ニシテ能動(或ハ発動)ハ是レ利他ノ用ナリ(中略)能動ノ作用ハ必ズヤ他ニ到入セザル可カラザルナリ 而シテ到入スルモノハ必スヤ他ヲ利スル所ナカル可カラサルナリ(若シ利スル所ナキモノハ忽チ排斥セラレテ到入スルコト能ハサレバナリ)故ニ能動ノ作用ハ其能ク能動ノ性能ヲ成就スル以上ハ常ニ利他ノ用タラサル可カラサルナリ 転シテ所動ノ作用ヲ推論スルニ若シ夫レ自己ニ不利ナルモノ

ナランカ 直ニ之ヲ攘斥シテ決シテ之ヲ受用スルコトナキナリ 故ニ所動ニシテ其性能ヲ成就スル以上ハ必ス自己ニ利アル用タラサル可カラサルナリ

〔二二〕 自利利他〔上〕『全集』二、六三—六四頁

清沢は、所動の作用とは、自己に不利なものは排斥して決して受用しないことから、必ず自己に利をもたらしはたらき、すなわち「自利の作用」でなければならぬと推究する。また、能動の作用とは、他にはたらきかけて他を必ず利するものでなければならぬことから、それは「利他の作用」であると論究している。

このように「自利」と「利他」は、万有の所動と能動の実際の正當なはたらきである。しかし、現実の人間（有限）の活動は、この正當な作用と正反對の、「自ノ所動タルヘキヲ他ノ所動トスル自害」<sup>③</sup>と、「自ノ能動タルベキヲ他ノ能動トスル害他」<sup>④</sup>という作用が混じるために、紛擾・錯綜することになるのである。ここに、この機土においてまさに「自害害彼、彼此俱害」<sup>⑤</sup>しているわれわれの現実相が明確に指摘されている。そして次のように論じる。

今無限ニ就テ之ヲ云フニ無限ハ開展覺了ノ体ナレハ迷乱ノ存スベキナシ 故ニ無限ノ行為ハ自利利他ノ

外アルコトナキナリ 其自利ノ徳性之ヲ智慧ト云ヒ利他ノ徳性之ヲ慈悲ト云フ（中略）此二徳性ヨリシテ實際ノ行為ヲ生ズ 之ヲ方便ト云フ

〔二三〕 自利利他〔下〕『全集』二、六四—六五頁

清沢は、人間に対して神仏（無限）は、すでに覺了した存在であるから、自利・利他の行為のほかに自害・害他という迷妄や混乱が生じることはないと述べる。そして、無限の自利の徳性を「智慧」、利他の徳性を「慈悲」と言い、この二つの徳性から生じてくる摂化・救済のはたらきを「方便」と定義する。この「方便」という徳性は、有限心霊、すなわちわれわれ人間には存在しないはたらきである。清沢は、「心霊ハ皆悉ク智情意ノ三用ヲ具フト雖トモ自利利他方便ノ必然ニ至リテハ無限ニアラサレハ之ヲ明認シ難キナリ」<sup>⑥</sup>と記して、自利・利他・方便は無限でなければ明確に認めることはできないと論じている。ここに、無限存在の特質を窺うことができよう。

それでは、無限による摂化・救済が提起されてくる必然性とは一体何であろうか。清沢は〔二四〕救済ノ必要〕において次のように述べている。

抑有限ノ無限ニ到達スルハ其内性ノ無限力ヲ開展ス

ルニアリト云フ（所謂仏性ヲ開顯スルニアリト云フモノ是ナリ）然レトモ彼ノ開展ノ事ハ夫レ自然ニ現起シ得ルモノナルヤ（中略）決シテ然ル能ハサルナリ 万有ノ開展ハ皆悉ク因縁果ノ法軌（骸骨参照）ニ従ハサル可カラサルナリ 而シテ結果ノ質量ハ常ニ因縁ノ質量ニ順スルモノナリ 果シテ然ラハ今有限ガ開展シテ無限ノ結果ヲ得ンニハ必スヤ因縁ノ中ニ無限元素ヲ具ヘサル可カラズ 而シテ因素ハ則チ現在ノ有限ナリ 故ニ無限ハ必ス縁素ニ存セサル可カラズ 即チ有限ノ因ヲシテ無限ノ果ニ達セシムルノ縁ハ其用無限タラサル可カラサルナリ

（全集）一六、六六頁）

有限が開発・発展して無限へと到達するためには、因縁果の法則にしたがって、因か縁の中に必ず無限の要素をそなえていなければならない。なぜなら、結果の質量は因と縁の質量に一致するからである。しかし、因であるわれわれは、常に自害他して煩悶憂苦している無明の身である。したがって、そのような有限存在（因）が無限（果）に至るためには無限の縁が作用しなければならない。この有限にはたらく縁こそが「無限の方便」なのである。

ここで注目すべき点は、「因素ハ則チ現在ノ有限ナリ故ニ無限ハ必ス縁素ニ存セサル可カラズ」と述べて、有限の内部に無限の存在を認めず、自己の外部、すなわち縁素に無限の存在を確かめて、無限による救済の必要性を説示しているということである。清沢は、有限な自己の内に無限の性能が潜んでいると信じて、自力の奮励によってその潜在的な無限の性能を開発しようとするあり方を「自力門」、それに対して、有限な自己の外に無限の存在を認めて、この無限の妙用に帰依・信順して身を投じその光明に照らされようとするあり方を「他力門」と定義していた<sup>⑦</sup>。そして『骸骨』では、例えば「抑二者（自力門と他力門…筆者註）は相涵蓋を為すものにして常に相応合せざるべからざるものなるのみならず若し相離る、ものなれは真正の信行にあらざるなり」<sup>⑧</sup>と述べて、自他力二門の立場を両立させて客観的に討究していた。しかし「試稿」においては、自力門の原理を一応は説明しつつも、自身は他力門の立場に立脚して有限存在の救済について推究しているのである。ここに、自己の救済について浄土真宗の教えによるしかないという清沢の明確な選択と決断を窺うことができるであろう。

さて清沢は、その縁素の内実について次のように論じ

ている。

實際ノ悟道ニ於テハ或ハ有限ノ縁（飛花落葉）ニ由テ得ルヤノ形跡ナキニアラサルガ如シト雖トモ是レ未ダ縁ノ有限ナルコトヲ証明スル能ハサルモノナリ何ントナレハ此ノ如キ場合ノ有限ハ其実无限ノ表徴タルヤモ計ラレサレバナリ

〔二四〕救済ノ必要〔全集〕六、六六頁

有限な凡夫の眼には、われわれに無限としてはたらく縁も、有限な縁として映ってしまうかもしれない。しかし、有限である因を無限の果へと到達させる縁は、そのはたらきにおいて当然無限でなければならぬのである。清沢はこのことを、晩年の講演では次のように語っている。

精神主義と云ふは、宗教的見地に立ちて、私共の如き力の足らぬ者が、他力の無上の力に依りて、其力を進むるのであると云へます。客観主義では、他の人に就て、善悪等の判断を下すが、精神主義では、さうではないのである、例へば自分を殺しに來た者があるにしても、其殺されんとしたために悟を開いたとしたならば、其殺さんとして來た罪人は、自分にとりて善知識である、如来の大命を奉じた使であ

る。であります。又私共の家へ盜賊が這入つても、其盜まれたことに就て、私共が自覺する所があり、啓示を齎らしたならば、世間では縱令罪人であると云はるゝも、私にとりては決して罪は認めぬのであります、却つて善知識であると喜ぶ次第であります。

〔精神主義〔明治三十五年講記〕〕〔全集〕六、一七〇頁

これは清沢が自己の信念である「精神主義」について、客観主義ではなく主観主義であることを唱道している一節である。他者にとっては一見有限に見えるものも、宗教的見地、他力の信念に立脚すれば、自己においては善知識、すなわち如来の大命を奉じた使徒として領受される。この場合、殺人者や盜賊は、自己の悟りにとって無限のはたらきであると了解されるのである。ここに、われわれ有限に対して縁としてはたらく「無限の方便」の真相が、あらためて討究される必然性が生じてくるのである。

## 二 無限の変現

清沢は〔二二〕「方便」において、「方便」の意義について次のように論じている。

抑吾人ノ方便ヲ説ク彼ノ无限ノ悲智運用ノ大活路ト

スルニアルナリ 其对接スル所ハ固ヨリ有限ノ心靈  
タリ（中略）無限ガ其本真実相ノ儘ヲ以テセンカ  
有限ハ到底之ヲ受用スル能ハサルナリ 一段ノ巧策  
ニ依テ以テ接化ノ業ヲナサバ爾可カラサルヤ論ヲ待  
タズ 是ニ於テカ真実至誠ノ妙智ヲ動カシ茲ニ有限  
ニ連接スベキノ大活路ヲ設ク（中略）方便ハ無限ノ  
真相ヨリ出テ、有限ノ当相ヲ完収セサル可カラサル  
ナリ 乃チ無限ヨリ出テ、有限ニ接シ有限ヲ転シテ  
無限ナラシメサルヘカラサルナリ

（『全集』二、六九—七〇頁）

仏教書によれば、「方便」には「虚構詐訛ノ事」<sup>⑩</sup>と  
「至重ノ必須方法ノ事」という正反對の意義がある。し  
かし清沢は、「方便」とは有限心靈に対して無限の智慧  
と慈悲を運用する大いなる活路であると言う。有限は真  
実そのものである無限をそのままの相で受用することは  
できない。したがって、無限はその本性を棄てて、善巧  
をもつて有限に接近しなければならないのである。この  
ように「方便」とは、無限の真相から出て有限の現実に  
即応し、有限を無限に転化させるはたらきを有するので  
ある。清沢は、この無限の変現について次のように述べ  
る。

無限ノ変現トハ無限ガ変シテ有限ノ形式ニ顯現スル  
ナリ 有限ノ形式トハ他ナシ 空間時間ノ経緯ニ於  
ケル因果的事業ヲ起シテ以テ有限通入ノ門戸ヲ開示  
スルニアリ（法藏比丘ノ因源果海ノ徳相即是ナリ）

（『二六』方便）『全集』二、七〇頁）

無限は、空間的・時間的に自己を限定して顯現するこ  
とによつて、有限（衆生）の摂取・救済を行う。その内  
実を清沢は、一如より形を現した法蔵菩薩（阿弥陀仏）  
の相に確かめていこうとする。また「『二八』疑難」に  
は次のように記されている。

絶対無限ハ凝然真如ナリ 相對無限ハ隨緣真如ナリ  
凝然真如ハ其名ノ如ク湛然トシテ不作一法ナリ 隨  
緣真如モ亦其名ノ如ク緣ニ隨テ造作諸法ナリ 今有  
限ノ衆生ヲ緣トシテ大悲ノ方便ヲ垂ル、ハ則チ此隨  
緣真如ノ妙用ナリ（中略）他力門ニハ不變真如隨緣  
真如ヲ法身上ニ區別シテ法性法身方便法身ト云フ  
其方便法身トハ因果的報身仏ナリ

（『全集』二、七四—七五頁）

ここで清沢は、『大乘起信論』の真如縁起の教説を踏  
まえて、無限に「絶対無限」と「相對無限」の二面があ  
ると言う<sup>⑪</sup>。絶対無限とは凝然真如、つまり不動不作、湛

然寂靜なる法性法身のことである。それに対して相對無限とは、隨縁眞如、すなわち因果の形式によつて有限界に現前・現成する方便法身のことである。曇鸞は『淨土論註』『障菩提門章』において、「方便」の語を註釈して、「正直曰「方」、外己曰「便」。依「正直」故生「憐愍」一切衆生「心」、依「外己」故遠「離」供養恭敬「自身心」と言うのであるが、これによつて方便法身とは、まさに一切衆生の救済を願つて出現した如来であると了解することができよう。

無限と有限には絶対の斷絶がある。したがつて、両者がその絶対的隔絶を超えて關係を結ぶためには、無限と有限の兩義的・中間的性格を有する存在が必要不可欠となる。それが相對無限、すなわち淨土門における阿弥陀仏である。絶対無限は自己の無限なる本性を棄却して相對無限となり、相對世界に入つて一切の有限存在を無限に轉化させる活動を行うのである。このように清沢は、他力門哲学の救済体系を、二種法身説を手がかりとして、「絶対無限―相對無限―有限存在」の關係として推究しているのである。

さて、清沢は「二七」無限ノ因果」において次のように自問する。

因果ハ有限ノ理法ニシテ無限ハ因果ヲ超絶セルモノナルコトハ喋々ヲ要セサルベシ（中略）然ルニ今无限ガ因果ノ形式ニ表現セントセバ必スヤ先ツ其无限ノ本性ヲ棄却セサルベカラサルナリ 既ニ无限ノ品位ヲ棄却シテ有限ニ帰セシガ茲ニ再ビ无限ノ願行ヲ成就セズンバ本位ノ无限ニ還復スルコト能ハサルナリ 是レ願行ノ因ニ依テ還証ノ果ヲ得ザル可カラサル所以ノ原基ナリ 而シテ衆生済度ノ業事此間ニ成弁スル理由ハ如何ト云フニ先ニ无限ガ其本位ヲ棄却スルハ抑何ノ為ナルヤ

（全集」一、七二頁）

そもそも因果とは有限内の理法であり、無限は本来、因果の道理を超絶したものである。にも関わらず、なぜ無限はその本性を棄却して因果の形式をとつて有限界に現出するのであるうか。相對無限はどうして無限の願行を成就しようとするのであろうか。これらの問いに対して、清沢は次のように自答していく。

他ナシ衆生済度ノ大悲ニ起因スルモノナリ 衆生悲憐ノ為ニ无上ノ大覺ヲ棄却シ反テ迷界ニ投入ス 是レ其无上位ノ功德ヲ讓テ衆生ニ惠施スルニ外ナラザルナリ 此ニ依テ衆生ノ能ク此功德ヲ受用スルモノハ自己ノ行業ニヨラズシテ全ク他力ノ救済ニ与惠ス

ルヲ得ルナリ（中略）無限譲与ノ功德ニヨリテ有限大覺ノ利益ハ彼ノ展現有限ノ因果ノ内ニ包括セラル、所以ヲ知ルベシ 乃チ彼ノ展現有限ガ元ノ無限ニ還復スル因ノ願行ニ於テ有限救済ノ本意ヲ發揚スル所以ハ蓋シ此故ナリ

〔二七〕無限ノ因果〔全集〕二、七、一七三頁

無限は迷妄する衆生を悲憫するがゆえに、無上の大覺を棄却して迷界に自身を投入する。無限はその無上位の功德を衆生に譲り施すことによって、衆生の救済という事業を完遂するのである。「無上位ノ功德ヲ譲テ衆生ニ恵施スル」とは、如來の他力回向を意味しているのである。清沢は、このような無限のはたらきを「展現有無限」と名づけて、有限存在を包摂・救済する無限の大悲心を表現している。展現有無限の願行、すなわち法藏比丘の本願と修行は、衆生往生の増上縁、本願他力としてわれわれにはたらくのである。

この法藏菩薩の現前・現成について、曾我量深は次のように論じている。

「如來の救済」とは我等衆生を如來にすると云ふことである。而して我々人間を如來の位に救ひ上げるがために如來は先づ御自の如來の御座を捨て、人間

世界に降誕し給ひた。久遠の如來が衆生救済の爲めに因位の一比丘法藏とならせられたは、正しく人間を救はんが爲めには先づ救はるべき迷悶の人間の精神生活を実験せんが爲めに外ならぬ。否法藏比丘の出現は正に如來が人間精神の究竟の実験である。此実験の告白が本願である。本願とは他なし如來が何故に一人間となりしかを説明せしもの、法藏出現の大精神の外に本願はないのである。

〔曾我量深選集〕四、三四—三四二頁

これは「法藏比丘の降誕は如來の人間化也」と題した論考の一節である。絶対無限の如來は、いったん有限界に沈潜することによって、一切の有限存在を摂取・救済しようとする。曾我は、久遠の阿彌陀如來がその地位を捨てて人間界に降誕し、人間僧法藏となつて出現したのは、迷悶する人間を救済して如來位を恵施せんがためであると述べる。この現働こそ阿彌陀の本願にほかならない。したがって法藏菩薩は、衆生を救済せんとして如より來生する従果向因の菩薩なのである。

無限ガ此ノ如クシテ有限ニ譲与セル功德ハ如何ニシテ其適當ノ利益ヲ施スニ至ルベキヤ他ナシ 無限ガ其譲与ノ意向ヲ開示シテ之ヲ十方ニ明ナラシムルト



有限ガ此開示ヲ認承シテ之ヲ受用スルニアリ 然リ而シテ此ノ如キ開示ト受用ハ蓋シ相對ノ事業ニシテ有限界内ノ現象タラザルベカラサルナリ 故ニ此事業ハ彼ノ无上位ヲ棄却シテ展現シタル有限ガ其願行ニ於テ之ヲ開顯セザル可カラサルナリ

〔二七〕 無限ノ因果〔全集〕二、七二頁

清沢は、無限がその功德を譲与する意向を十方に開示すると、有限はその施与された功德を承認して受用すると述べる。この「開示」とは如来の回向のことであり、「承認」「受用」とは衆生の發信、すなわち信心を發起することである。清沢は「四一」他力信行」において、他力門の信行は凡夫の迷情を根本から控除するものであると述べた上で、有限心靈に發起する眞實信心について、「無限の妙用」<sup>⑬</sup>であり「顯在無限ノ廻向賦与」<sup>⑭</sup>であると示している。ここで清沢が、単に「無限」ではなく「無限的」「顯在無限」と記していることに注目したい。これは、一如法性より來生した阿弥陀如来のことであり、清沢の言葉で言えば、絶対無限が自己を限定して出現した「相對無限」「展現有限」のことを説示しているのである。

ここに、清沢が再構築した他力門哲学の救済の道理が

披瀝されていると言えよう。有限世界で活動する相對無限、すなわち展現有限の概念が見出されることによって、有限と無限の動的な關係が一層明瞭になる。これによって、有限の覺醒の構造が究明されることになるのである。

### 三 無限共同体の開顯

清沢は「三〇」願行成就（無限之因果）」において、無限の願行の「願」とは、「自利利他ノ大道心ヨリ起レル願望」<sup>⑮</sup>であり、「所謂極樂淨土或ハ安樂世界ノ建立」のことであると述べて、その内実について次のように論じる。

因願果徳ノ一端ヲ摘述センニ願条无量ナリト雖トモ自利利他共利ノ三種トスベシ 自利ノ願ハ其結果トシテ主莊嚴ノ徳相ヲ成スル所ノモノ仏ノ光明壽命等ノ徳相ニ関スル願是ナリ 次ニ利他ノ願ハ其結果トシテ眷屬莊嚴ノ徳相ヲ成スル所ノモノ眷屬ノ光明壽命ノ无量ヲ願スル等是ナリ 此内特ニ一切ノ有限ヲ撰取スルノ願ヲ他力教ノ要願トス 第三ニ共利ノ願トハ主伴ノ両者が居住スル所ノモノニシテ国土清淨純善无惡妙樂円滿等ノ徳相ヲ願スル所ノモノ是ナリ 此ノ如ク願因ノ自利利他共利ト三様ナルニ応シテ成

果二主莊嚴伴莊嚴国土莊嚴ノ三者アリ 安樂国土ノ  
莊嚴ハ本願心ヨリ起ルコトヲ領解スベキナリ

〔全集〕一、八〇頁

浄土という世界は、自利の願と利他の願と共利の願の三種の願心から成り立っており、それに応じてそれぞれ、主莊嚴、伴莊嚴、国土莊嚴という三種の徳相を成就している。そして、その安樂国土の莊嚴は、阿弥陀仏の本願より發起しているのである。世親は、「莊嚴仏土功德成就と莊嚴仏功德成就と莊嚴菩薩功德成就とは、願心によって莊嚴されている」と言うが、願心莊嚴とは、浄土というものがどこかに実体的に存在していてそれを莊嚴するということではなく、浄土は浄土を莊嚴する本願のほかにあるのではないということの意味しているのである。

また、清沢は「〔三二〕三種莊嚴」において、「天親菩薩浄土論二曰ク 二十九種ノ功德三種ノ莊嚴二種ノ清浄ハ一法句ニ略入ス 一法句トハ清浄句是ナリ」と記していることから、無限世界の様相について、世親の『浄土論』に示唆を受けながら推究していることが窺える。この清沢の浄土観について、安富信哉は次のように指摘している。

浄土は、それぞれ本願によって、自利・利他・共利

の徳が円満した、すなわち、主・伴・国土が有機的関係を結び、円満成就した世界であるといえます。

浄土が主・伴・国土から成り立つということは、そこに暮らす住民とそれを取り巻く環境とから成り立つ具体的世界であることを意味します。その意味では、浄土は協同体です。同時に、浄土は無限界でありますから、それは、〈無限協同体〉といえることができます。

（「個立と協同」―石水期・清沢満之を手懸かりとして―）

一、一頁

清沢は、『骸骨』で考究した「有機組織」「主伴互具」の概念を手がかりとして、浄土とは主・伴・国土が有機的関係を結んで円満成就した主伴互融の世界であると言う。ここに浄土は、一切の有限存在に対して「無限共同体」として開顕されることになるのである。

そしてさらに清沢は、これら三種莊嚴のうち、特に伴属莊嚴の成就に無限共同体としての浄土の特性を見出していく。

独リ伴属莊嚴ニ至リテハ是レ无限界ノ特象ニシテ有  
限界ニ見ル能ハサル所ノモノナリ 何ントナレハ有  
限界ニハ彼此各々箇々別立シテ互ニ相下ラサルカ其

当相ナレハナリ 一有限ハ如何ニ之ヲ打撿スルモ其内ニ他ノ有限ヲ從容スベキ必然ヲ具ヘサルナリ 然ルニ無限ニ至リテハ全ク之ニ反シ一物モ其範圍外ニ存スルヲ許サ、ルナリ 故ニ有限如何ニ夥多ナリト雖トモ皆無限ノ内ニ包括セラレザル能ハサルナリ 是レ無限ノ主尊ニハ夥多ノ伴属ナカルヘカラサル基本ナリ

〔三三〕伴属莊嚴「全集」二、八四頁

清沢は、主莊嚴と国土莊嚴に対して、伴属莊嚴だけが無限界の特別な事象であると述べる。なぜなら、有限界においては、有限と有限は個々別立していて互いに他の有限を受容する必然性をそなえていないからである。したがって、有限界の万有心靈は、他の有限者に対して怨敵であるかのような迷謬を抱くことになりかねない。しかしながら、安樂淨土という無限世界においては、その淨土に生まれた有限、すなわち伴属は、互いに同等に関連し合つて共同体を形成することができるのである。ここに、一切の衆生が同一の地平に立脚することのできる絶対的世界が開かれることになる。

清沢の晩年の論考に「真の朋友」と題した文章がある。そこには次のように記されている。

真の朋友と云はるべき根拠は、やはり、宗教的根拠

でなくてはならぬ、即ち絶対無限の他力を信ずると云ふことが根拠でなくてはならぬ。(中略) 宗教的朋友は、彼も絶対無限に信憑し、此も絶対無限に信憑し、其信憑する所の絶対無限は、唯一不変であるがゆゑに、此根拠の上に立つ所の朋友は、永久不変の朋友でありて、決して相離反することがない、又絶対無限に信憑して、常に満足の心に住するものなるがゆゑに、互に相侵し相傷ふ様なことがない、(中略) 故に真の朋友、即ち、永久不変の朋友は、必ずや、絶対無限の他力を信憑する上に立つ所の朋友でなければならぬ、即ち真の朋友は宗教的朋友でなければならぬ。

〔全集〕七、三一〇—三一頁

清沢は、真の朋友とは宗教的根拠に立脚するものでなければならぬと述べる。永久不変の朋友というのは、必ず絶対無限の他力を信憑する上に成立する関係でなければならぬと言うのである。例えば、同郷や同学、同窓といった相対有限の不完全な事情を友情や信賴の根拠とする限りは、その有為転変を免れることはできない。したがってわれわれ有限存在は、唯一不変である絶対無限に帰依・信順することによって、初めて真の連帯を構築することができるのである。これこそが、宗教的信念

の確立の上に開かれてくる平等一味の地平、すなわち信仰共同体である。

さて清沢は、このような有限と有限の連関について、「〔二六〕方便」において次のように述べている。

無限ノ方便ニヨリテ有限ガ開展シテ自ラ無限ニ到達ス 到達シ了レハ更ニ自ラ方便ヲ起シテ他ノ有限ヲ開展セシム 此有限モ亦自ラ無限ニ達セバ更ニ方便摂化ノ事ニ従フ 此ノ如ク展転シテ底止スル所ナク目的ハ手段トナリ目的ハ手段トナリテ窮止スル所ナキナリ

〔全集〕二六、七一頁

有限は、無限の方便によってひとたび無限に到達したならば、自然に方便を起こして他の有限を開発・発展させようとする。そして、その有限もまた無限に進達したならば、さらに他の有限を摂取・教化しようとしてはたらくのである。このように、有限の開展は連綿と継続して停止することがない。この有限の展転・開発の様相は、親鸞によって

盡十方の无碍光佛

一心に歸命するをこそ

天親論主のみことには

願作佛心とのべたまへ

願作佛の心はこれ

度衆生のこゝろなり

度衆生の心はこれ

利他眞實の信心なり

〔高僧和讃〕『定本親鸞聖人全集』二六、八四頁

と詠われた和讃と同様の内実を表していると思われる。尽十方無碍光如来に帰命する一心は願作仏心であり、その心は衆生を摂取する心、すなわち度衆生心として展開する。したがって、無限に帰依した有限は連続無窮にして休止することなく、他の有限を無限へと覚醒せしめるはたらきをなすようになるのである。

清沢は「〔三四〕有限ノ信心（花開蓮現）」において、さらに次のように論じる。

最初ニ一無限ノ開成スルアレハ其因果中ニ他ノ有限ノ開成ヲ包蔵シ此増上縁ニ依テ開成セル無限モ亦其他ノ有限ヲ開成セシメ展転引導シテ開発止ムコトナシ（中略）有限ノ願行ハ其内ニ一切有限ノ願行ヲ摂スベキコト論ヲ待タサルナリ 而モ亦各有限ノ有限的願行ニアラズシテ無限的願行ヲ摂スルナリ 乃チ一切有限ガ各々無限ニ開展セントスルノ願行ヲ摂尽スルモノナリ 然ラズバ無限ノ願行ハ真ノ無限ノ願

行ニアラサル可ケレハナリ (『全集』一六、八五頁)

この一節は、先に引用した「〔二二六〕方便」の文章と同様の内実を述べているのであるが、ここで注意すべき点は、「有限ノ願行ハ其内ニ一切有限ノ願行ヲ撰スベキコト論ヲ待タルナリ 而モ亦各有限ノ有限の願行ニアラズシテ無限的願行ヲ撰スルナリ」と推究している点である。<sup>⑬</sup>ここに語られる「有限」とは、単なる有限な存在ではない。それは、その内部に、一切の有限が無限へと開発・展開しようとする無限的願行を包摂している有限なのである。すなわち、他の有限を目覚ましめるはたらしめを内包した有限であると了解されているのである。

ひとたび無限的自己に目覚めた有限者は、他の有限存在に対しても覚醒を賦与するはたらしめを行うようになる。このように有限は、浄土という無限世界に触れることによって、その活動のベクトルが無限から有限へと転換せしめられるのである。<sup>⑭</sup>

清沢によって考究された無限世界、それは三種莊嚴によつて成就された清浄国土であり、自利利他円満の安楽国土である。この浄土という絶対的境界において、迷妄する無数の有限は摂取・救済され、そこに一味平等の地平が開かれてくる。すなわち浄土は、一切の有限存在に

とつて「無限共同体」として開顕されるのである。

#### 四 転迷開悟

清沢は「〔三七〕煩惱」において、宗教の目的について次のように述べている。

宗教ノ目的ハ有限ヲ無限ニ開展セシメントスルニアリ 所謂転迷開悟ハ即是ナリ 迷トハ無限ヲ遠離スル境界ニシテ悟トハ無限ニ近合スル境界ナリ 此迷悟ノ分ル、所以ハ一二無限ヲ覚知スルトセサルトニ起因スルモノナリ (『全集』一六、八九頁)

宗教の目的というのは、有限を無限へと開発・展開させることであり、われわれ人間の迷いを転じて悟りを開かせることである。すなわち、宗教の核心は「転迷開悟」にある。そして、この迷いこそが仏教で言う「煩惱」のことであり、有限存在を迷界に繫縛して煩悶苦悩させる原因である。清沢は、この迷悟が分かれる所以を、有限と無限の關係をもとに次のように推究している。

有限無限ノ關係ヲ覚知セサル(即チ無限ヲ覚知セサル)本源ヨリシテ能所彼我隔歴ノ妄見ヨリシテ乃至八万不可計ノ塵勞門ニ繫在スル境界之ヲ名ケテ迷界ト云ヒ此界ノ住者ヲ凡夫ト云フ 之ニ反シテ彼ノ顚

倒ノ妄見ヲ翻掃シ有限無限ノ關係ヲ覺知セル（即チ無限ヲ覺知セル）ヨリ以上ノ境界之ヲ名ケテ悟界ト云ヒ此界ノ住者ヲ聖人ト云フ

（『三九』迷悟凡聖『全集』二、九五頁）

そもそも有限には、無限に対する關係と他の有限に対する關係という二つの關係が存在する。しかし、もし有限が無限を覺知しないならば、有限無限の有機組織、主伴互具の關係を覺了することなく、他の有限や無限自体に対して顛倒の妄見をいだくようになる。それに対して、そのような迷情を翻転して有限無限の關係を覺知したならば、有限は妄見の世界を離れることができるようになる。ここに、迷界に住する凡夫と悟界に住する聖人との差異が生じることになるのである。

次に清沢は、信心を獲得した有限存在の内景について考究していく。「四三」正定不退」には次のように記されている。

他力門ノ信者正信獲得已後ヲ正定聚不退位ニ住スト云フ 正定聚トハ正ニ大果ヲ成スルニ定マル聚類ノ義ニシテ又宗教上ノ大安心正ニ定リタル聚類ノ義ト云フベシ

（『全集』二、九五頁）

清沢は、浄土真宗の鍵概念である「正定聚」という用

語をもちいながら、それは有限の心身を有しながら、直ちに無限の資格があることを自覺する境地であると明らかにする。これは、親鸞が『教行信証』『証卷』において、

煩惱成就凡夫生死罪濁羣萌獲往相回向心行即時入大乘正定聚之數住正定聚故必至滅度

（『定本親鸞聖人全集』一、一九五頁）

と自釈した文と同様の内実を表すものである。煩惱具足の凡愚は、本願の名号に開かれる眞実信心を獲得することによって現生に大乘正定聚の位に住し、そして正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る大般涅槃道に立脚せしめられる。このように親鸞は、選択本願の行信が実現する往生道を難思議往生として顕揚するのであるが、清沢の考究はこの親鸞の了解を正確に聞き当てたものであると言えよう。

清沢は続けて、他力門の正定聚不退転者の様相を、自力門の信奉者と対比して次のように論じる。

他力門ノ正定聚不退転者ハ自己ノ行業ニ依ラズ純ラ他力ノ救済ニ任スルモノナルカ故ニ此地位ヨリシテ彼ノ大果ニ到ルニ夥多ノ階次ヲ経ルヲ要セス此土命終ノ立所ニ大般涅槃ノ妙果ヲ証得ス（中略）自

力門奉教者ハ假令一段ノ不退位ニ達スト雖トモ其上ノ階次ハ更ニ幾何ノ難行苦修ヲ勉メスバ妙覺ノ大果ニ進ム能ハサルガ故ニ不退位ノ歎喜モ亦前途進修ノ念慮ニ擾妨セラル、ヲ免カレサルナリ 是レ他力門ノ不退位ハ前後二途ニ対シテ正定ノ歎喜地ナリト雖トモ自力門ノ不退ハ只後途ニ退轉ノ憂苦ヲ除キタルノミニシテ前途ノ証果ニ対スル煩慮ヲ去ラサルノ大差違アルニ由ルモノナリ

〔四三〕「正定不退」全集二、九五—九六頁

他力門の信奉者は、自己の行業にはよらず、專一に他力の救済に身を任せるわけであるから、ひとたび現生正定聚の位に住したならば、必ず無上大涅槃を得証することができると。したがって、これ以降は段階的な「階次」を経る必要がない。しかし自力門の信奉者は、一段の不退轉の位に到達したとしても、それは再び迷界に退轉するという憂苦を除去するのみであって、未来の涅槃の妙果のためにはさらに段階的な難行苦修を修めなければならない。それゆえに、不退位の大慶喜心を相續することはできないのである。ここに、自力門の不退位と他力門の不退位の差異が明確に示されている。

清沢は、絶筆「我は此の如く如来を信ず（我信念）」

において、自己の信念を次のように表白している。

私の信ずる如来は、来世を待たず、現世に於て既に大なる幸福を私に与へたまう、私は、他の事によりて多少の幸福を得られないことはない、ケレトモ如何なる幸福も、此信念の幸福に勝るものはない、故に信念の幸福は、私の現世に於ける最大幸福である、此は私が毎日毎夜に実験しつゝある所の幸福である、来世の幸福のことは、私はマダ実験しないことであるから、此処に陳ることは出来ぬ、

〔全集〕六、三三三頁

私の信ずる如来、すなわち他力門の如来は、信念確定の一念に平穩と安樂を賦与するものであり、世間のいかなる幸福もこの信念の幸福に勝るものはない。信念の幸福は現世における最大の幸福である。清沢はこのように述べて、来世の幸福、つまり死後往生の觀念を破つて、他力救済の現在性を明らかにしている。

さらに清沢は、正信決定後の有限存在の内面の実相について究明していく。〔四五〕「信後風光」には次のように述べられている。

獲信ノ得益甚タ多緒ナリト雖トモ一括シテ之ヲ云フトキハ宗教ノ目的ヲ遂成シテ信者ノ心底一大安喜ノ

發現スルニアリト云フ可シ 所謂慶喜歡喜ト称スル  
モノ是ナリ（中略）然レトモ信心決定ノ行者必シモ  
忽チ全ク仏陀ト化シ常ニ淨土ニ住スルニアラズ 彼  
ノ自力門大悟ノ大士モ亦悟後ノ修行ノ完カラサル間  
ハ生身ノ仏陀ニアラサルカ如ク他力教門ノ信者其信  
心実金剛ノ堅ヲ持スト雖トモ若シ夫レ煩惱紛起シテ  
邪念強盛ノ時ニアリテハ或ハ外道惡魔ニ近似スルコ  
トナシト云フ能ハサルナリ

〔全集〕二、九七—九八頁

信心を獲得した他力門の信者は、正定聚の位に住し平生業成の大慶喜心を得ることになる。そして、この慶喜・歡喜の心は常に相續して断絶することはない。したがって信者は、さらなる行業を修する必要はないのである。しかしこのことは、信心決定の行者が完全に仏陀となつたり常に淨土に住したりすることを意味するものではない。他力門の信者は金剛の信心を獲得するのであるが、この現生に有限の生身を有する限り、過去曠劫已來の惡業煩惱がこの身に生起するのである。

このように「信後の風光」を述べるとき、清沢は、親鸞が「正信偈」に次のように頌する信念の心境を憶うていたのであるうか。

能發<sup>ク</sup>一<sup>スレハ</sup>念喜愛心<sup>ノ</sup>ヨ  
凡聖逆謗<sup>ヒシク</sup>齊<sup>ニ</sup>回入<sup>ハ</sup>  
攝取<sup>ノ</sup>心光常照<sup>ニ</sup>護<sup>シタマフ</sup>  
貪愛瞋憎之雲霧<sup>ハ</sup>  
譬如<sup>ハ</sup>日<sup>オホハ</sup>光覆<sup>レトモ</sup>  
雲霧<sup>ニ</sup>之下<sup>ニ</sup>明<sup>ニシテ</sup>無<sup>キ</sup>闇<sup>カキ</sup>

〔定本親鸞聖人全集〕一、八六—八七頁

一切善惡の凡夫は信心歡喜の一念に、煩惱を斷ずることなく涅槃分を得る。凡聖・逆謗はひとしく平等一味の救済にあずかる。そして、常に攝取の心光に照護されて人生の夜明けを賜るのである。たとえ貪欲と瞋恚の雲霧に心が覆われても、もはや無明の間ではないのである。清沢は、この親鸞の教示を承けつつ、他力門の信心の内景を思念していたのではないだろうか。

清沢はその晩年に、自己と他力救済の教えとの關係を次のように表白している。

われ、他力の救済を念するときは、我か世に属するの道開け、  
われ、他力の救済を忘るゝときは、我か世に処するの道閉づ。  
われ、他力の救済を念するときは、われ物欲の為に迷はさるゝこと少く、



われ、他力の救済を忘るゝときは、われ物欲の為に迷はざるゝこと多し。

われ、他力の救済を念するときは、我が処するところ光明輝き、

われ、他力の救済を忘るゝときは、我が処するところ黒闇覆ふ。(「他力の救済」『全集』六、五九頁)

「濁浪滔々の闇黒世裡」すなわち、濁った波がとどまることなく押し寄せる闇黒の世の中にあつても、人間存在の自覚をうながして止まない阿弥陀如来の本願を憶念するとき、自分自身が真に救済されていく道が開かれてくる。しかし、ひとたび自我意識に心を奪われるならば、その歩むべき道は黒闇に覆われ閉ざされてしまう。清沢はこのような述べて、親鸞の他力救済の教えを「処世に於ける完全なる立脚地」<sup>②</sup>として顕揚するのである。

清沢は「試稿」において、どこまでも有限な自己の自覚に立脚しながら、しかもその有限が無限に転化・進達し得る可能性を論理的に推究していく。すなわち、凡夫としての分限を自覚しながらも、転迷開悟の構造を哲学的に解明していくとする。それは、一切の有限存在が平等に摂取・救済されていく他力門の行道を開顕しようとする清沢の求道心、宗教心の表れにはかならない。こ

こに、他力門哲学における覚醒の構造が再構築されることになるのである。

### おわりに

清沢満之の直門で浩々洞の同人であつた曾我量深は、清沢の師恩・学恩について、同じ明治期における浄土真宗の先覚者たちの功績と比較しながら次のように顕彰している。

東西本願寺の先覚者たちは、いろいろ仏教界のためにお尽くし下さったご恩というのは、私どもは忘れることはできないわけであります。しかしですね、(中略)これらの多くのお方々は、やはりこの上層建築の事について、大へんにまあお骨折り下されたという事を思うのであります。だからそれらの方々の中においてですね、上層建築のことよりも、もっぱら基礎工事、つまりこの仏教、特に浄土真宗のおみのりについての基礎工事のために、短い一生がいをささげられたのが、わが清沢満之先生である。(中略)私は、清沢先生という方は、他の先覚者たちと色彩を異にしておると思うのでございます。

(「他力の救済—清沢満之師「他力の救済」について—」

明治期に活躍した先覚者の功績を建築に喩えるならば、多くの先達は仏教界の上層建築について尽力したのに対して、清沢ただ一人が、仏教、特に浄土真宗の教学の基礎工事に専念することにその一生を捧げた。したがって清沢の存在は、他の先人たちと比べて特別な存在なのである。曾我はこのように述べて、清沢への謝意を表白しその恩徳を讃仰している。

そしてさらに曾我は、「基礎工事と申しますのは、まあ『大無量寿経』で申しますならばですね、法蔵菩薩、因位法蔵菩薩、つまり因位法蔵菩薩の仕事を引き受けて、一生がいをささげられた方が清沢満之先生である」と述べて、浄土真宗の基礎工事に献身した清沢の志願を、因位法蔵菩薩の願心にまで遡って明らかにしている。まさに清沢は、近代において親鸞の本願他力の思想を再興した思想家であり、近代真宗教学の基礎を確立した仏教者であったのである。

さて、清沢の「試稿」は、冒頭でも述べたように、他力門哲学の理論的構造を説明しようとした論稿であった。清沢は、他力門の教学を西洋哲学の言語と概念をもちいて究明することによって、その独自の意味を再構築した

のである。そういう意味では、「試稿」は浄土真宗の綱格を明らかにした基礎工事的著作であると言える。

しかしその営為は、単なる学理的・理論的関心によるものではなく、肺結核を思い、まさに死と隣り合わせの緊迫した状況の中で、有限なる自己の立脚地を浄土真宗の教えに求める懸命の営為であった。本願他力の救済は、清沢の自力無効の自覚として実現されるのである。そして、そこに成就される他力の信念は、煩悶憂苦する迷悶者に大いなる心の平安を賦与するのである。ここに、有限の心身でありながら無限の成果を感受する他力門哲学の覚醒の精髓が開示されることになる。

## 註

① 「試稿」の構成について、今村仁司の指摘（『清沢満之における『他力門哲学骸骨試稿』の思想的意義』『現代と親鸞』第九号所収、親鸞仏教センター、二〇〇五年、一六七—一七二頁参照）によりながら整理すると次の通りである。

0. 序論（宗教論）——「二」宗教
1. 存在論（有限無限論）——「二」無限——「二」補訂
2. 人間学（心靈論）——「二」心靈——「二」汎神論万有開展論

### 3. 実践哲学（修行論）——「二二」自利利他「上」

「四五」信後風光

本稿では、これら四つの学的課題の内、主に「二二」自利利他「上」以降に展開する他力門哲学の修行観、すなわち覚醒の構造を中心に考究することとする。

「試稿」における清沢の宗教観・存在観・人間観について論じたものに、拙稿「他力門仏教の再構築——清沢満之『他力門哲学骸骨試稿』の思想的意義——」（現代と親鸞）第十四号所収、親鸞仏教センター、二〇〇八年）がある。詳しくはそちらを参照されたい。

- ② 西谷啓治「清澤先生の哲学」（『清沢満之の哲学と信仰』所収、黎明書房、一九六三年）一六六頁、今村仁司『現代語訳 清沢満之語録』（岩波現代文庫、二〇〇一年）四五六頁、安富信哉『清沢満之全集』第二巻解説（岩波書店、二〇〇二年）四三—四二五頁、などを参照。

- ③ 「二二」自利利他「上」『全集』二、六四頁参照
- ④ 同前

- ⑤ 「大経」『真宗聖教全書』一、一五頁
- ⑥ 「二三」自利利他及方便ノ必然『全集』二、六五頁
- ⑦ 「骸骨」『全集』一、一—二二—二八—二九頁、「試稿」『全集』二、四八—六六—六九頁、などを参照。

- ⑧ 「骸骨」『全集』一、三〇頁
- ⑨ 「二六」方便『全集』二、六九頁
- ⑩ 同前

- ⑪ 安富信哉「個立と協同——石水期・清沢満之を手懸かりとして——」（『親鸞教学』第八二・八三号所収、大谷大学真宗

学会、二〇〇四年）一〇九—一一〇頁、西本祐攝「清沢満之の『現在安住』」（『大谷大学大学院研究紀要』第二〇号所収、大谷大学大学院、二〇〇三年）七四—七六頁参照

- ⑫ 「真宗聖教全書」一、三四〇—三四一頁

- ⑬ 「全集」二、九三頁

- ⑭ 同前

- ⑮ 「全集」二、七九頁

- ⑯ 同前

- ⑰ 「浄土論」『真宗聖教全書』一、二七五頁参照

- ⑱ 「全集」二、八二頁

⑲ 傍点を付した「有限ノ願行」について、今村仁司と藤田正勝はともに「無限の願行」と読み替えて現代語訳を行っている（今村前掲書一四四頁、藤田『現代語訳 他力門哲学骸骨』（法蔵館、二〇〇三年）一〇三頁参照）。しかし、本文でも言及するように、この「有限」は、単なる迷妄存在としての有限を指しているのではなく、無限を覚知した有限、他者の覚醒に積極的に関与する有限を意味していると思われる。したがってここは、清沢の誤記などではなく、原文通りに読むべきであろう。

- ⑳ 今村仁司『清沢満之と哲学』（岩波書店、二〇〇四年）七五—七六頁参照

- ㉑ 「他力の救済」『全集』六、一五九頁

- ㉒ 「精神主義」同前、三頁

- ㉓ 「他力の救済——清沢満之師「他力の救済」について——」（『文明堂、一九七五年）八五頁